



5月2日

2015年(平成)

発行所：東京都千代田
千100-8051 電話03-
毎日新聞東京

慢性疲労症候群 3割重症

厚労省初調査 家事で悪化も

日常生活が困難になるほどの強い疲労や倦怠感が続く「慢性疲労症候群」の患者の3割が、寝たきりや、それに近い重症であることが、厚生労働省の初の調査で分かった。日常の家事や通院だけで動けなくなったり寝込んだりしてしまつ人も多く、患者の厳しい実態が明らかになった。

【下桐実雅子】

推定患者数は全国で約30万人。感染症や脳内の中枢神経系の異常などとの関連が指摘されているが、発症の原因は不明。これまで国内では「慢性疲労症候群」どの名称で知られていた病気が、最近では患者団体などが「単なる疲れや怠けているわけではない」として、「筋痛性脳脊髄炎」と呼ぶようになっている。国の難病対策の助成対象には含まれていない。

調査は、厚労省の委託を受けた聖マリアンナ医科大学の遊道(あそみち)和雄教授らが昨年から今年1月に実施。医療機関で診断を受けた全国の患者251人(男性56人、女性195人。平均年齢42歳)に調査票を送り、それに基づいて電話や訪問などで聞き取りをした。その結果、「身の回りのことができず介助が必要で、終日起きられない」「1日中の半分以上は横になって筋痛性脳脊髄炎と慢性疲労症候群

いる」など寝たきりに近い重症の人が約30%もいた。症状は「肉体的精神的疲労」

筋痛性脳脊髄炎・慢性疲労症候群の主な症状

- ・最小限の活動によって身体が衰弱し、症状が悪化する
 - ・体力の回復が非常に困難
 - ・日常生活が著しく損なわれるほど激しい疲労
 - ・微熱、頭痛、のどの痛み
 - ・筋力の低下、筋肉痛、関節痛
 - ・思考力、集中力の低下
 - ・不眠や過眠などの睡眠障害
 - ・自律神経症状
 - ・主な病気の原因は中枢神経系の機能異常や障害と考えられる
- 以上の症状などが重なり、長期にわたって持続し、健全な社会生活が送れなくなる病気のほか、「睡眠障害」「体温調節障害」「広範な痛み」が多かった。家事の後に動けなくなる人は約70%に達した。また重症者の96%が通院後にも寝込んでいた。

「病気の無理解」「社会的な孤立」などが続いた。NPO「筋痛性脳脊髄炎の会」の篠原三恵子理事長は「重症患者の実態が初めて明らかになった。軽症でも日常的な家事で症状が悪化する深刻な病気のため、家事支援など公的な福祉サービスが必要だ。患者が身体障害者手帳を取得しやすくなるほか、難病対策の対象にしてほしい」と訴える。

毎日新聞
2015年5月2日夕刊 第一面